



ラムサール COP14 現地リポート

2022.11.05～13@スイス・ジュネーブ

2022/11/07 報告者：安部真理子

ラムネットJの呉地正行氏（NPO 法人ラムサール・ネットワーク日本理事／日本雁がんを保護する会会長）がラムサール賞・ワイズユース（湿地の賢明な利用）部門を受賞し、11月7日の夕方に授賞式が行われました！日本人のラムサール賞受賞は3人目、ワイズユース（湿地の賢明な利用）部門では初の受賞となります。



「ラムサール賞」は、長年にわたり湿地の保全と持続可能な利用に多大な貢献をされた個人や団体を讃える賞として、1996年にラムサール条約締約国会議において創設されたものです。「ワイズユース（湿地の賢明な利用）部門」、「ウェットランド・イノベーション（湿地イノベーション）部門」及び「ヤング・ウェットランド・チャンピオン（若者の湿地チャンピオン）部門」の3つの部門があり、今回は呉地氏の功績「水田の生物多様性の向上、渡り鳥の生息地としての質の向上を目指す活動、湿地を生息地とする鳥類の保全活動」などが評価されました。

絶滅寸前だったシジユウカラガンの保護活動に取り組み、ラムサール条約湿地である蕪栗沼・周辺水田で、冬場も水田に水を張る「ふゆみずたんぼ」という伝統農法を用い、シジユウカラガンの生息地を提供してきた功績が評価されました。同賞の3つの部門のうち「ワイズユース（湿地の賢明な利用）賞」の受賞は日本人として初めてです。



この日の受賞スピーチで呉地さんは「半世紀に及ぶ湿地保全の努力は容易ではなかったが、夢を分かち合ったさまざまなグループの同僚たちと乗り越えてきた」と語っています。



今回、呉地さんと一緒に「ヤング・ウェットランド・チャンピオン（若者の湿地チャンピオン）部門」にはマングローブ林などでクリーンアップ活動を進めるフェルナンダ・サミュエルさん、「ウェットランド・イノベーション（湿地イノベーション）部門」では車いすの方も

湿地観察ができるよう遊歩道を作ったカーラ・キシメラさんとギラルド・マルカさん、それから湿地保全に特別に貢献してきた人に贈られるメリット賞にジェローム・ビグノンさんが受賞されました。



COP会場内のラムネットJのブースでは、大崎市の鳴子温泉郷での大規模風力発電計画について「シジュウカラガンの渡りに重大な影響を与える」と訴えるポスターが掲示されています。

環境省作成資料より <https://www.env.go.jp/content/000083432.pdf> :

呉地氏の功績

- ・ 2008年のラムサール条約第10回締約国会議(COP10)において、ラムサール条約決議 X. 31 「湿地システムとして水田の生物多様性の向上(水田決議)」※1の草案作成及び、国内外の調整を通じて同決議案を採択に導いた。
- ・ この決議は、水田の湿地としての認識と価値を高め、農業における生物多様性向上の主流化に大きく貢献することとなった。
- ・ この決議履行のため、ラムサール条約湿地である蕪栗沼・周辺水田(宮城県大崎市・登米とめ市・栗原市)などで、農家や地元住民、行政の協力を得て、生物多様性を向上させるとともに、ガン類の越冬地を提供する冬期湛水水田(「ふゆみずたんぼ」)の取組を行っている。この「ふゆみずたんぼ」の取組は日本全国の様々な地域に広がっている。
- ・ また、ガン類の渡り経路の解明に1970年代から取り組み、絶滅の危機に瀕したガン類、特に日本への渡りが途絶えたシジュウカラガン個体群の再導入をめざし、日露米の関係者の協力を得ながら渡りと生息地の回復事業を実施継続してきた。40年に及ぶ歳月をかけ、現在、9,000羽以上のシジュウカラガンが日本に飛来するようになった。

※1 「湿地システムとして水田の生物多様性の向上(水田決議)」 日本と韓国が共同提案し

た決議。水田が水鳥を始めとした様々な生物の生息地として重要であることを認識し、生物相の調査を進め、情報交換を行うこと、また、生物多様性を高めるような農法や水管理方法を特定し、実践することを締約国に求めるもの。